

ただ一度の出会い、そして別れ

遠山 博雄

(外国語部長)

八十木先生とはとても短いおつきあいでした。あるいは、おつきあいとさえ言えないのかも知れません。先生が北海道教養部から本校に移られてからのことです。お顔を拝見していたのも、5年程だったでしょうか。所属教室も違い、研究室も離れていたため、委員会の席などで何回か仕事のお話をしたことがあったきりでした。あの4月の18日だったか19日だったかの、良く晴れた午後のひとときまでは。

あの日私は、「通学マナー向上キャンペーン」に参加しての帰り道、駒沢の交差点を246の北側に渡ろうとしていました。その時、向こう側の歩道に赤いブルーゾンに銀髪の小柄な男性がニコニコしておられるのを認めました。どうもこちらを見ておられるらしい、でもそれがどなたなのか、そもそも私のことを見ておられるのか、分かりませんでした。ひとは予期せぬところで予期せぬひとに出会うと一瞬不意を撃たれて意識が宙吊りになってしまうことがあります。あの時もそんな状態でした。もしかしたらこのひとは私に目で何かを語りかけておられるのかもしれない、と思って半信半疑のまま近づいていって、「あっ！八十木先生だ」とこちらが気付いたのと、先生が「八十木です」と名乗られたのと同時でした。

先生は前々日にご退院になったところで、大学の私のもとにご報告方々必要書類を届けにみえ、私が不在だったために、交差点のところで帰りを待っていてくださったようでした。お見受けしたところお顔の色もよく、足どりもしっかりしておられて、お声がかすれていたことをのぞけば、とても病み上がりの方とは思われませんでした。長いご入院から解放されてホッとなさっておられたので、ひとなつかしい眼差しととろけるような微笑みをうかべられて、ご病気の経過についてお話しになり、北海道に戻って治療を続け、後期にはなんとか復帰したい、と静かにおっしゃっておられました。長い時間お引き止めしてもと思

い、「それではお大事に、お帰りをお待ちしています」と申し上げてお別れしたのですが、まさかあれが最後になってしまうとは、あの時は思いもありませんでした。

思えば、遠く江別から東京に単身赴任され、ご不自由な生活に耐えながら、毎日早朝から深夜まで研究室にこもってお仕事をされていたその勤勉さが、そして委員会ひとつ、授業一回おろそかにされなかったその誠実さが、かえって先生のおからだに障り、ご健康を蝕んでしまったのでしょうか。とても残念です。とはいえ、もとより本当にご無念だったのは先生ご自身だったはずで、これから母校のために一仕事も、二仕事も、とお思いの矢先に病魔に魅入られる結果になってしまったわけで、私などの想像の遠く及ぶところではありません。

本当に短いおつきあいでしたが、あの日の先生のおだやかな眼差しと輝くような微笑みは、ひとがひとを迎える時にこんな表情ができるものかと思わせるような、神々しいまでのアウラを漂わせていて、かえって健康に恵まれた私の方が癒されてしまったほどで、今にして忘れることができません。真の意味での出会いとは、あのような特権的な瞬間のことをいうのではないのでしょうか。人生においてそう何度も訪れる経験ではありません。先生の遺してくださった宝物として大切にさせていただきます。

八十木先生、長い間のお仕事とご闘病、お疲れさまでした。どうぞごゆっくりお休みください。どうもありがとうございました。さようなら。